國弘　暁子　*KUNIHIRO Akiko*

≪書評≫

瀬地山角編

『ジェンダーとセクシュアリティで見る東アジア』（勁草書房、2017 年）

Jendaa to sekushuariti de miru higashi ajia (East Asia Seen Through the Lens of Gender and Sexuality). Edited by Sechiyama Kaku. Keisō Shobō, 2017.

東アジア圏には、資本主義や社会主義という異なる社会体制が存在するが、それら社会体制の基層には土着の文化とも言うべく盤石なジェンダー規範が存在している。そのジェンダー規範をベースにして成立する社会体制とは、表面上は同じ社会主義、あるいは資本主義であっても、異なった特徴を見せてくる、というのが本書の編者である瀬地山氏による二〇年来の主張である。例えば、母親に求められる育児の役割規範については、社会主義と資本主義という違いがあるにもかかわらず、「チャイニーズ」の中国と台湾はどちらも希薄であるのに対して、「コリアン」の北朝鮮と韓国では非常に重要視される特徴が明らかになる。そして、中華でもなく朝鮮でもないが、部分的に地続きにある日本については、もう一つ別の区分として、「ジャパニーズ」と瀬地山氏は表現する。このような瀬地山氏の主張をサポートする内容の論文によって、本書の第一部は構成されている。

後半の第二部では、前部とは対照的に、東アジア地域という条件を除けば、各論文は互いに関連づけられることなく、それぞれが独立した内容の論文である。そのため、第一部の第一章からから順を追って読み進めてしまうと、第二部からは突如として秩序を欠いたセクシュアリティの領域に投げ出されたかの

ような印象を読者は持ってしまうかもしれない。しかし読者の大半は、順番にとらわれることなく、興味ある章から読み始めるものと思われるが。以下では、第一部と第二部を構成する各論文の中身を、順を追って見ていくこととする。

瀬地山氏の論文に続く第二章の野田論文では、「家族団らん」の食卓を理想とする風潮が今も強い現代日本と食について議論される。野田氏によれば、「家族団らん」は理想でありながらも、しかし、雇用条件の良い職場で正社員として働く女性とその配偶者で構成される家族でないと、その理想を達成することは難しいという。多くの母親たちは非正規社員として働きながら家で食事をつくり、仕事外出時間の長い夫が不在となる「団らん」を支えている。さらに、家族にとっての食卓の意義が重視されるあまりに、家族を持たないシングルの人々が食に労力を費やさない傾向を生じさせているとも野田氏は示唆している。

第三章では、韓国の主婦向け雑誌の教育関連の記事を分析対象として、子供の教育マネージメントを生き甲斐にする母親たちの姿を明らかにする。韓国は高学歴女性の有業率が上昇しない特徴を有することが瀬地山氏によって指摘されているが、その点について柳氏は、韓国の労働市場が女性の急速な高学歴化に対応できていないことに加えて、高学歴の女性たちが自ら家庭内に留まることを選択し、率先して教育マネージャーの役割を担い、自己の能力を発揮しているのだという。

第四章は、前章と同様に高学歴女性たちの活動を明らかにする、台湾フェミニズムに関する福永論文である。台湾では政治の自由化が進行した 1980 年後半、アメリカの大学でフェミニズム理論や運動の影響を受けた留学生たちが帰国し、そして女性運動を展開していく。そこから枝分かれして、性的少数者運動と連帯していく「フェミニズム的性解放運動」の成立過程とその展開について、福永氏は緻密な分析を提示している。

第五章は、韓氏による「全国オモニ（母親）大会」を取り上げた論文であるが、瀬地山氏によれば、日本では北朝鮮のジェンダーに関する研究はほとんど

なく、その意味で、瀬地山氏による先行研究も含めて貴重な論文と言えるだろう。北朝鮮ではこれまでに計 4 回「全国オモニ大会」が開催されており、韓氏の論文では、金日成、金正日、金正恩それぞれの時代背景を踏まえた、大会での言論内容の分析が行われ、女性に求められる役割が検討される。

第一部の最終章は、中国の企業組織の分析を通じて、中国型の家族構造を明らかにしようとする中村氏の論文である。中国では、日本や朝鮮半島とは異なり、年齢差に応じた上下関係よりも、均分相続に象徴される兄弟間の平等な関係が重んじられ、そして、親（ボス）への服従も徹底されている。このような家族構造を組織のベースにして中国企業では仕事の効率を上げることを、中村論文は具体的に示している。

第二部を構成するのは、まず、第七章の台湾における「LGBT フレンドリー」に関する福永論文である。先の第四章において、福永氏は台湾の「フェミニズム的性解放運動」について詳細な分析を行っているが、部門の壁が邪魔をしてか、台湾フェミニズムと「LGBT フレンドリー」との連続性が見えてこない。しかし、単独の論文として読めるような完成度を福永氏が目指した結果でもあるのだろう。とりわけ、国際社会での台湾のプレゼンスを高めるために、政治エリートたちが LGBT の人権問題を巧みに取り入れる点に関する分析は非常に興味深い。

第八章の瀬地山論文では、中国との比較において、日本社会におけるセクシュアリティのあり方を考察する。本論文のオリジナリティは、これまでセクシュアリティ研究では取り上げられることのなかった中国の自慰行為に関する調査データを見出し、それを活用している点にあるだろう。自慰行為とは人間の生存に不可欠だとは言えないものだが、自慰の経験率が時代に応じて変化している事実を指摘し、その理由として、性欲とはそもそも外的要因によって作り出されるのであって、もとより本能として備わるものでないと強調する。

第九章の森山論文では、二〇一〇年以降の日本社会におけるゲイをめぐる問題について、「おしゃれ」である、「普通」であるとして形容され、あるいは

自らをそのように形容する状況分析を通じて考察する。第七章の台湾のケースと比較してみた場合、日本では政治よりも経済に左右されるかたちでゲイが優遇される場面が生じやすいことがわかる。社会の容認のあり方やそのスピードには台湾と日本とでは違いながらも、寛容になったかのように見える現状を手放しでは喜べないという両研究者の立場は共通しているようだ。

第二部最終章の守論文では、中国の BL が主題となる。日本の漫画本やテレビアニメを即座に取り入れてきた中国であるが、政府による海賊版の取締りが強化されたこと、そして、インターネットが普及したことを背景にして、BL 作品のローカル化が進んでいるという。当初は日本の BL 作品が翻訳されていたが、のちに中国オリジナル BL 作品が登場するようになり、また規制が緩いネット上で BL ドラマが普及している。守氏の分析によれば、日本の BL マンガには少女マンガ特有の表現方法が用いられる点が特徴だが、日本の少女マンガの技法を学ぶことができなくなった今の中国では、映像という媒体を通じて、独自の手法で BL が表現されるようになったという。この流れが、今後の中国で定着するのかどうか、守氏は関心を示している。

以上、第一部では、瀬地山氏の冒頭の論文に呼応し、またそれを補強する若い研究者たちによる研究論文が並んでおり、冒頭論文を道しるべとして読み進めることができる。そして第二部では、各論文はそれぞれ独立しながらも、現代の政治や経済によって左右される私たちの生や性の在りようを映し出している。第一部と対比させると、現代社会で生じる新しい現象というのは、往往にして、セクシュアリティを一つのキーワードとして浮上する特徴を有しているようにも考えられ、一読者として、大いに思考を刺激された。